

## 「花咲かぬ時の草木」と「色々の花」

岩崎雅彦

世阿弥は『風姿花伝』第三「問答条々」第四項で、役者同士が芸を競い合う立合勝負について論じているが、その中で次のように述べている。

物数をば似せたりとも、花のあるやうを知らざらんは、花咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし。

物まねをよく似せて、多くの役柄をうまく演じこなしでも、花のあり方を知らない役者は、例えて言えば花が咲いていない時の草や木を集めて見るようなものだ。

いくら役をうまく演じる技術を持っていても、それが魅力あるものとして観客に伝わらなければ意味がない。どうすれば芸の面白さが伝わるかということを演者は常に考える必要がある。そうした工夫をしない役者を世阿弥は「花咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし」と表現している。

枝葉は花が咲くために必要不可欠な要素である。世阿弥は能を演じるのに必要な技術を枝葉に例え、そこに咲く花を芸の面白さに例えている。花が咲くためには土台となる枝葉

が必要であるが、それと同じように、能を演じるためには基礎となる技術が必要である。しかし、ただ技術を見せるだけでは面白い芸とは言えない。観客が役者の芸を見て面白いと思っただけで芸としての意味があるのである。

枝葉は、そこに花が咲いて初めて鑑賞の対象となるのであり、枝葉自体は見て面白い物ではない。花が咲いていない草木ばかりをいくら集めて見たところで意味はない。世阿弥は技術だけを見せる演技を、わざわざ花の咲いていない時の草木だけを集めて見る行為に例える。この「花咲かぬ時の草木を集めて見」という表現の源として『古今集』秋・上の詠み人知らずの歌を挙げることができる。

みどりなるひとつ草とぞ春は見し  
秋は色々の花にぞありける

春に見た時には、どれも緑一色の同じ種類の草と見えたが、秋になって花が咲いてみると色とりどりの様々な種類の花であることが分かった。上の句は春、下の句は秋の情景で、両者を対比させて詠んでいる。緑一色の草が

季節の移り変わりによって色彩豊かな景色へと変化する。草だけの時には色が同じで違いが分からなかったが、花が咲いて初めて、その色や形によって種類の違いが認識できた感動を詠んでいる。

花の咲いていない多くの草を同時に見るという上の句の表現は、「花咲かぬ時の草木を集めて見」という世阿弥の比喩と発想が似る。色とりどりの花を見た時の感動は、世阿弥に置き換えれば、役者の芸を見た観客の感動と重なる。草に花が咲くためには季節の推移という条件が必要だが、能に花を咲かせるために必要なのは役者の意識・工夫である。

世阿弥はまた「問答条々」第八項で、花よりもなお上の「萎れたる」芸境について、次のように説明している。

花の萎れたらんこそ面白けれ、花咲かぬ草木の萎れたらんは、何か面白かるべき。美しい花が萎れるからこそ味わいがあるのであり、花の咲いていない草木が萎れても面白くはない。同様に花を極めた役者だけが、その上の萎れたる境地に至ることができるのであって、技術が優れているだけでは、この境地に至ることはない。ここでも観客に面白さが伝わる工夫をしない役者を花咲かぬ草木に象徴させている。

「問答条々」では、「花咲かぬ時の草木」の少し前に、立合勝負における若手とベテランの対戦について、桜の木の比喩を用いて次のように論じている。

いかなる名木なりとも、花の咲かぬ時の木をや見ん、犬桜の一重なりとも、初花色々と咲けるをや見ん。かやうの譬へを思ふ時は、一旦の花なりとも、立合に勝つは理なり。

ここではベテランを華やかな桜の名木に、若手を地味な一重の犬桜に例え、花が咲いていない名木よりも、地味ではあつても花が咲いている犬桜の方が観客の目を引くと説明している。世阿弥は名木の状態を「花の咲かぬ時の木」としているのに対し、犬桜の状態を「初花色々と咲ける」としているが、これはやや不自然な記述である。「初花色々と咲く」というのは、その季節になつて様々な種類の花が色とりどりに咲き始めるといふ意味であり、犬桜という一種類の花が咲くことにこの表現を使うのは、そぐわない感がある。これは『古今集』歌の下の句「秋は色々の花にぞありける」という言葉が世阿弥の念頭にあり、それに影響を受けた可能性がある。両者の表現には、いずれも花の咲いていない時と咲いている時の状態を対比する構想の中で使われているという共通点がある。

もつとも、花が色々に咲くというの、ごくありふれた表現である。『拾遺集』雑・秋の平兼盛の歌(一一〇一番)の詞書に

円融院の御屏風に、秋の野に色々の花咲き乱れたる所に、鷹据ゑたる人あり。

と、屏風絵についての記述がある。また『撰集抄』卷六・第十一「武蔵野ノ郁芳門院ノ侍之

事」は、西行が武蔵野に通世した郁芳門院の侍に出会う有名な話だが、その冒頭の記述は次のようになっている。

さいつころ、武蔵野を過ぎ侍りしに、東西南北草のみ茂りて人も住まず、草花色々に咲き乱れて、ももうらに唐錦を広げたらん心地のし侍りて、

武蔵野に一人隠遁する老僧の家居の周りに、萩や桔梗など秋の草花が咲き乱れる情景は、『西行物語絵巻』でも、お馴染みの場面である。和歌では『後拾遺集』秋・上の清原元輔の歌(二六六番)

色々の花の紐とく夕暮れに

千代まつ虫の声ぞ聞こゆる

が著名である。「色々の花」という表現は、『古今集』以来、秋の情景描写として使われることが多い。『藤原隆信集』(四三〇番)

色々の花咲く秋の夕まぐれ

野をもろともに見る人もがな

や、『文保百首』の一条内経(三四四番)

色々の花のもも草こきまぜて

野辺こそ秋の錦なりけれ

などがある。後者は柳桜を春の錦と詠んだ素性の歌を本歌とし、「色々の花」を使うことによって、秋の情景に詠み換えている。

世阿弥作「泰山木」では、桜町中納言が

金銀珠玉色々の、花の祭りを急ぐなり

と桜の寿命を延ばす祭りを行う。ここでは「色々の花」という表現を核として、「金銀珠玉色々の」(金銀珠玉など、色々の捧げ物を

して)、「色々の、花の祭り」(花の寿命を延ばす様々な祭り)を行うことを述べる。ここでは、「色々の花」は実景ではなく文飾として使われているが、「色々の花」を春に使うのは世阿弥の特徴である。

世阿弥はまた、冒頭に挙げた引用部分に続けて次のように記している。

万木千草において、花の色も皆々異なれども、面白しと見る心は同じ花なり。

様々な種類の木や草の場合、花の色もそれぞれ違ってはいるけれど、それを見て面白いと感じる心は同じである。これと似た発想の歌として、元永二年(一一一九)『内大臣家歌合』の源兼昌の歌がある(十六番)。

秋くれば千草に匂ふ花の色

心ひとつにいかでしむらん

『平経盛朝臣家歌合』の参河の歌(二十二番)は、この歌を踏まえる。

秋の野の千草の花の色々を

心ひとつに染めてこそ見れ

秋の野に咲く色とりどりの花を見て楽しむことを世阿弥は様々な種類の物まねを見て楽しむ観客の心になぞらえている。

「みどりなる」の歌は、春と秋を対比させた論理的な構成になっている。それと同時に色とりどりの花が咲く情景は、きわめて感覚的である。世阿弥能楽論が精緻な論理を展開しながら優れて文学的である背景には、和歌の伝統的な表現が存在した。

(国学院大学非常勤講師)